

奈良国立文化財研究所編

川原寺発掘調査報告

岸 俊 男

川原寺、またよんで弘福寺、大和飛鳥の地を巡られた方々には説明するまでもなからう。飛鳥寺址安居院を出て南し、岡寺や石舞台を見学したのち、帰路天武・持統合葬陵などを訪れるべく、岡の部落から西に向う県道を歩み出してすぐ、左手一段高く白壁に囲まれているのが橘寺。それとちようど道をはさんで右手対称的な位置に、うしろに小高い丘をひかえ、田の中に南面してあるのが川原寺。そのすぐ東を飛鳥川が流れている。今は創建時の建築や仏像は何一つ遺っていないささやかな小寺院で、ただ本堂前の庭内処々にいわゆる瑪璃（大理石）の立派な礎石が露出し、また門外にそれと知られる石標の立つ塔址土壇の望まれるのが、僅かにこの寺の大寺であった往時の面影を偲ばせているに過ぎない。しかし日本書紀や統日本紀には、天武朝以後しばしばその名がみえ、平城遷都以前は飛鳥寺や大官大寺などと並んで、つねに大寺の一つに数えられていたし、また和銅二年の弘福寺領田畠流記帳以下奈良・平安時代の寺領関係文書も若干伝えられており、ことに天平七年弘福寺領讃岐国山田郡

田図は現存最古の田図として著名であり、これらの点からも古代史を学ぶ者にとつてはなじみ深い寺院である。

寺域は大正十三年以来史跡に指定され今日に至つたが、こんど農林省によつて大和平野灌漑導水路工事が立案実施されることとなり、当初の計画によるとその幹線が右の史跡指定地内を通過することになった。そこで文化財保護委員会は遺跡保存のため事前に寺域の充分な調査を行うことを必要と認め、同種の目的をもつたさきの飛鳥寺発掘調査に引きつづいて奈良国立文化財研究所が事業を担当することとなり、田沢坦所長のもとにその建造物研究室（森蘊・浅野清・杉山信三・鈴木嘉吉・工藤圭章の諸氏）と歴史研究室（坪井清足・金閃恕・田中琢の諸氏）が主体となつて、昭和卅二・卅三兩年度に前後三回、延べ約一七〇日間にわたつて伽藍主要部の全面的発掘調査が行われた。発掘は建築プランを割出して重点的局部的に行う坪掘り調査とは異り、能う限り伽藍の全域を全面的徹底的に精査しようとしたものであつたから、最近の寺院址の発掘では、同じような発掘方法をとつて多大の成果を取めた前記飛鳥寺の調査とならぶ大規模なものとして、学界から深い関心と大きな期待を持たれたものであつた。果してその結果は予期に違わず極めて貴重な数多くの収獲を斯界にもたらすこととなつた。本書はその発掘調査の報告書として公刊されたものであるが、いまそれを繙き、またそれに従つて以下調査の概要と成果の要点を紹介しようとするに先立つて、まず調査を担当された奈良文化財研究所を主体とする調査員の方々に敬意を表しておきたいと思う。川原寺の発掘調査には前述のような発掘方法がとられ、調査地域もかなり広範囲に及ぶとともに、

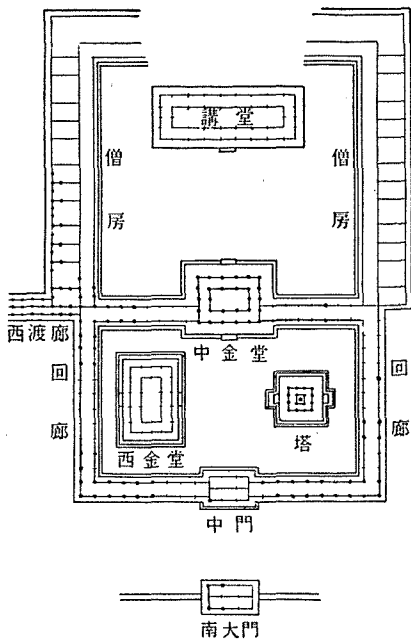
調査そのものには高度の精密さが要求された。これに対して調査要員と経費は決して充分ではなかつたようであるし、またこの種遺跡の発掘にはしばしばのことであると云いながら、本遺跡においても発掘予定地は水田が大部分を占めたため、第一次・第三次調査にはいずれも豊閑期が充てられ、厳寒時が調査の主要期間となつた。さらに今回の調査はそれ自体は純粹に學術的なものでありながら、行政的要請からなされたものであり、また文献史料を取扱うデスクワークとは異り、土地所有者との折衝など恐らく學問的技術的以外の問題に多くの困難や障害が存在したのではないかと思う。しかも敢然とそれら乗り越えて所期の目的が遂行され、輝やかしい成果がえられたことは、一に調査担当者の學問的情熱と誠意の然らしむるところであろう。また實際土を運び鍬を振つて作業に当られた人々の労苦や、地元村民の方々の協力と理解も忘れることができない。その意味でわれわれも本書からその貴重な成果を読み取るときに、その影に多くの人々の地味な努力と多大の犠牲の隠されていることに想いを致し、深謝の意を表しておきたいと思う。

二

さて本報告書は大別して本文と図面・図版の二部からなり、本文は六二頁、図面は一七葉、図版写真は五八頁となつている。その主体をなす本文は六章から構成され、はじめに調査の目的など概要を述べ、次章で川原寺の沿革を従来の諸研究を整理紹介しながら主として文献史料の側から要説、つぎに調査経過と調査日誌を記し、さらに二章を設けて発掘遺跡と出土遺物の一々についてその概略を説

明したのち、最後の章で今回の発掘調査によつて知られた諸事実に對する考察が加えられている。(一)遺跡の建築的考察、(二)伽藍配置、(三)寺地と条里、(四)結語というのがその第六章の構成であるが、とくに(四)においては発掘結果のまとめとして、(1)川原寺の創建年代についてかなり限定された時期を指摘することができるようになったこと、(2)新しい伽藍配置が確認され、その建築遺構や出土遺物のもつ特色が明らかになつたこと、(3)建久二年の川原寺焼亡と鎌倉中期の再建、さらに室町末期の再度の焼亡への過程が遺跡について実証されたこと、(4)川原寺創建以前の遺構が検出されたこと、(5)同時に附隨して行われた橘寺北門の調査により、橘寺寺域の北限が明らかになり、また川原寺造営や条里制施行との関連について問題が提起されたこと、の五点が掲げられている。私に課せられた役目は以上の内容をさらに詳しく、しかも要を得て紹介することであろうが、私は調査を担当しました本報告書を執筆された方々のように建築学や考古学を専攻する者でなく、その方面の知識には極めて乏しいから、貴重な成果の全貌を誤りなく読者に伝える自信はない。ただ私は幸い大和に住み、古代史を学ぶ一人として調査には日ごろ関心をもつていたので、機会あるごとに発掘現場を訪れ、實地について詳しい説明を受けたことも再三ならずあつた。その点甚だ恵まれた一人としてある種の責務を感じるし、またいま報告書を手にして読了するとき、いわば門外漢の私が、私なりの観点から問題を整理してみること、何かに役立つかと考え、筆を執ることとした次第である。従つて以下甚だ恣意的な叙述となると思うが寛恕せられたい。

川原寺遺跡は早く大正六年に回廊・南大門などの礎石多数が土地所有者の手により発掘され、ついで史跡指定後大正十二年には上田三平氏によつて金堂・塔土壇の実測と、さきに出土した礎石群確認のため一部の発掘調査が行われた。今回の調査はまずそれらの結果を手がかりに始められたが、南大門・中門・回廊・金堂(中金堂)が確認され、金堂の有名な瑪瑙礎石は全廿八個が完存していることが判明、また金堂と中門を結ぶ回廊によつて囲まれた中庭には、東に塔、西にこれと向き合つて建つ南北に長い仏殿(西金堂)の存在することが発見された。西金堂はさきに上田氏によつて一部発見さ



れた石敷を追究して基壇四周が明らかとなり、塔址では創建時の心礎も発見された。中金堂北方の講堂址は上部が完全に削平されていたが、掘込みの地かため土層を判別してその位置が決定され、さらにそれをめぐつて三面僧房の存在することも明らかとなり、ことに西僧房はよく残存し部屋割も知られた。その他回廊西北隅に渡廊の附属することがわかつて、その西方にさらに建物のあることが予想されるようになり、講堂北方にも建物の存在が認められた。また南大門の南に参道、それをたどつて橘寺北門と築地が発掘され、橘寺地域の北限が確かめられた。上図は以上のような発掘によつて推定復原された伽藍配置図(挿図三二より転載、二千分の一)であるが、もう一つ重要な発見は西金堂基壇の下部から川原寺創建以前の施設が見出されたことであつた。

そこでまずそのことに関連して、川原寺の創建年代の問題から述べよう。当寺の創建年代については第二章沿革で要説されているが、従来諸説あつて定まらなかつた。日本書紀で最初に川原寺の寺名に見えるのは孝徳天皇白雉四年六月の旻法師死去に関する記事の中であつて、

天皇(總)爾旻法師命終、而遣使用并多送贈、皇祖母尊(皇孫、の)及皇太子(中大兄、の)等皆遣使用旻法師喪、遂為法師一命画工狛堅部子麻呂・鯉魚戸直等、多造旻菩薩像二安置於川原寺、或本云、在山田寺、在とあり、つぎは天武二年紀に、天皇が壬申の乱に勝利し、飛鳥浄御原宮に即位した直後の三月のこととして、

是月聚書生、始亨一切経於川原寺一

とみえるものである。ついで天武十四年の川原寺行幸以後は類出し、とくに天武の深い帰依と厚い庇護を受けたことが書紀の記載から読みとれる。以上の書紀の記事のうち天武二年以後はまず疑いがないであろうから、川原寺創建年代の下限はいちおうここに置かれるが、白雉四年の記事は、或本云の異説のあることから必ずしも認める必要はないといわれる。仏菩薩像の川原寺安置を認めるとしても、それは白雉四年以後、むしろ発願者の齊明・天智の治世と考えてこの記事を生かすことも可能なのではあるが、川原寺創建が白雉四年まで遡りえないという考えには別の理由がある。それは川原宮との関係である。川原宮は齊明天皇が即位元年冬板蓋宮火災のため一時遷つた宮で、翌年には後飛鳥岡本宮が造営されたと伝えるから、一年足らずの臨時のものであつたらしい。しかしそれよりさき白雉四・五年に皇太子中大兄皇子が皇祖母尊らを率いて難波京から遷つたという飛鳥河辺行宮もその前身であつたのでないかと想定されている。ともあれ「川原」の字の共通であることから、この川原宮が川原寺となつたのでないかと考えられるからであつて、事実扶桑略記にもそのような伝えがある。従つてこの説によると川原寺の創建は齊明朝、あるいは天智朝ということになる。さらに齊明七年十一月紀には齊明崩御のとき「飛鳥川原」に殯したとあるので、これを同所とすれば、川原寺の建立はそれ以後、天武二年以前の十三年間に一応限定されることとなる。

以上は文献史料よりする創建論で、すでに福山敏男博士らによつても提唱されたところで、『奈良朝寺院の研究』、今回の調査結果

も右の推論をほぼ認めることとなつたようである。しかも従来史的には川原宮→川原寺を確認することができなかったのであるが、こんどの発掘によつて西金堂や中門遺跡の下層から川原寺創建以前と断定される遺構が発見されたことは、右の説を強化する上で大きな収穫であつた。その遺構とは周壁を玉石で積み、上部に大きめの石を並べて蓋とした内径一・五尺ほどの暗渠で、ほぼ二〇尺おきにマンホール状の開渠部分が設けられており、溝底からは木製の下駄・櫛などが発見された。西金堂や中門はそれを破壊して建てられたことが明らかなので、この暗渠は川原寺創建以前の遺構と推定された。しかも伽藍敷地全面にわたり池か沼を埋立てた根跡があり、またそこからの出土土器は様式的に七世紀前半を遡りえないという。

埋立の問題はこの排水溝とも関係するようであるが、ともかくこれらの点から、川原寺創建以前に恐らく建築工事を伴つた大規模な土木工事がこの地に行われたであろうとして、それを川原宮造営と想定されたのである。この創建前遺構の発掘は副次的なものとなつたため、建築遺構なども発見されず、埋立ての時期や状態などにもなお検討すべき問題が多く残されているようで、川原宮遺構と結論するにはなお時日を要すると思うが、この地と飛鳥川をはさんで位置する板蓋宮伝承地の調査も一部始められたが、このような付近飛鳥地方宮址の研究が進むことによつても次第に確かめられて来よう。

ところでこのように今回の発掘調査によつて川原寺の創建が齊明朝・天智朝であることがほぼ実証されると、それは大化以後天武朝までに建立された寺院の一つとして、その時期の歴史的考察の上からも注目すべきものとなる。例えば出土土瓦の詳細な調査によつて、川

原寺創建期は復弁八弁鐮歯文縁軒丸瓦と四重弧文軒平瓦が一組をなしていたことが知られたが、その中でとくに軒丸瓦の復弁蓮華文は、飛鳥時代の単弁蓮華文とは全く系統を異にするといわれるもので、その最も古い確実な例がこの川原寺でえられたという。しかもこのような瓦当文様式の変化をもし云われるように大化改新以後の初唐文化の輸入と結びつけて説くことが可能であるとすれば、別に検討された唐尺使用の問題とともに、それらは単に建築技術の問題にとどまらず、大化以後とくにしばらく頻繁であった遣唐使の往来とにらみ合わせ、やはり広く当時の日本への唐文化移植の速度をはかる一つの尺度となるかも知れない。

四

つぎはやはりその特色ある伽藍配置の問題であろう。さきの飛鳥寺の発掘によつて、中門と回廊で囲まれた内庭に、塔を中心としてその東西と北の三方に仏殿があるという従来予想だもされなかつたわが国最初の伽藍配置が発見され、大いに学界の注目をあびたが、今回の川原寺調査では、いわば飛鳥寺様式から東の仏殿を取除いたような、中金堂の前庭に塔と西金堂が対置する新しいプランの存在が確認された。このような塔に向い合う南北に長い東面の建物の存在は、すでに福山博士が上田氏発見の石敷から推定されたところであつたが（『奈良朝寺院の研究』）、このたびの伽藍の広域な発掘によつて他の建物との相互関係も明らかとなり、明確に一つの新しい伽藍配置の様式として設定されたことは、今次調査の最大の収穫である。すでに飛鳥寺式の発見によつて、従来ほとんど通説のごとく

みなされていた四天王寺式→法隆寺式（法起寺式）→薬師寺式という伽藍配置発展の公式が、各寺院址の伽藍配置の再検討とともに強く再考を迫られて来ていることは周知のごとくであるが、ここにまた考察の新材料を一つ加えたことになる。本書ではこの問題には深くふれていないが、すでに村田治郎博士などから新しい考えが提起されており（『初期伽藍配置の展開過程』、『史迹と美術』三〇ノ七）、今後この分野での論争をよぶことであろう。従来の伽藍配置様式論は四天王寺や飛鳥寺の先踏を百済や高句麗に求め、以後の様式はその日本的展開と考えるのが一般であつたが、川原寺のような場合は中国の影響をも考慮に入れなければならないのでなからうか。また塔と金堂が対置する配置様式としては近江崇福寺や筑紫観世音寺の例があげられ、川原寺との同時代類同性が指摘されているようであるが、崇福寺は山間の地形に極度に制約されたやや特殊な例であり、観世音寺は従来の調査では川原寺中金堂の位置に講堂があるから、類同性を考慮しつても川原寺伽藍配置はそれとして充分その意味が考究されねばならないであろう。その場合注意すべきは、やはり西金堂（飛鳥寺の東西金堂を含めて、金堂とよぶのはあくまで仮称で、仏殿というに止むべきでなからうか）で、その基壇周辺の石敷の形状も中金堂や塔と異なる特殊なもののようであり、かつ西金堂のものと推定されている礎石も珍しい形式であるというが、飛鳥寺東西金堂でもそのような傾向がみられたらしい。飛鳥寺の場合もそうであつたが、川原寺西金堂も基壇上部は破壊されていて、礎石の配列状態など全然判らないのは誠に遺憾であるが、このような建物の性格用途を知りたいものである。

同じ建築遺構に関しては講堂を囲む三面僧房の存在が明らかに
なり、僧房の現在知られる最古の例がえられたことも注目しなければ
ならない。川原寺の僧房は西僧房の遺構がかなりよく遺存してい
たので、その構造が明らかになつた。それは梁間四間のうち、前面一
間を吹放して通路とし、残り三間を居間とするが、桁行は二間と三
間の二種に割りつけ、一ブロックを中央に三間×三間の大部屋、そ
の両脇に三間×二間の小部屋をとりつけるようにして、この組合せ
が繰り返えされているという。僧房の研究は昭和廿四年石田茂作博
士によつて発掘された東大寺や、最近の解体修理を機会に同じ奈良
文化財研究所によつて詳しい調査の行われた元興寺極楽坊(奈良時
代僧房の研究)、『奈良国立文化財研究所学報』四)などにより大
いに進んだが、いずれも奈良時代も後期のものであつた。川原寺の
場合は創建当初から存在したようであるから、最も古いものであり、
小子房の存在も想定されている。僧房らしきものの史料は書紀には
「曼法師房」(白雉四)や「橘寺尼房失火、以焚十房二」(天武九)など
早く見えるが、川原寺の例によつてそのころの寺院における僧侶の
居住を具体的に知る貴重な一資料がえられたわけである。

五

さらに今度の調査で注目すべきことは、寺地と条里の問題が具体
的に考究され、この地域の条里制施行についても若干の資料がえら
れたことである。前述したように橘寺の北門と築地が発掘され、こ
れによつて橘寺地域の北限が明らかになつたのであるが、同時にこ
の北門が川原寺伽藍中軸線にはほ心を合わせて建つてゐること、ま

たその方位および築地の東西線は正しく東西南北を指してゐて、さ
きに石田博士らによつて調査された橘寺伽藍の中軸線方位と異なるこ
とが示され、しかもこの築地の北に沿つて東西に古道の走つていた
ことが現在の水田地形から推定された。また別に寛弘三年弘福寺牒
以下川原寺の所領に関する文書が遺つてゐるが、それに見える高市
郡東卅条三里(他に同条四里の一坪と廿八条一里に若干)の寺辺所
領の坪付を現在の地形にあてはめ、また現存小字名が検討された結
果、その橘寺北限の築地の線が東卅条の南限に当ることが知られた。
そこでこれらを材料にこの地域の条里の現地に即しての復原や、寺
地と条里の關係、条里制施行の問題などについて種々の考察が加え
られた。従前のこの種遺跡ではあまり試みられなかつた調査である
が、近時発達した条里制研究の要請に感じた適切な研究として大い
に尊重しなければならぬと思う。ことに条里制の問題を同研究所
がさきに航空写真をもとに作製した正確な千分の一地図によつてで
きるだけ精密に考えようとされたことは、未開拓の分野だけに明確
な結論はえられなかつたようであるが、今後の研究のあるべき方向
を示したものととして極めて有意義であると思う。従来の研究の多く
は二万五千分の一地図を基礎に復原するのが精々であつたが、これ
では本当は条里制の具体的施行解明など、土地についての精密な考
察を要する問題は、研究が進められる筈がないのであつて、この点
こんどの調査は条里制研究史の上でも注目すべきものとなる。

考察の詳細を伝える余裕はすでないが、若干気付いた点を記し
ておこう。本書では付近条里の復原において、南北においては三六
〇尺の整数倍の寸法がみられるのに対し、東西方向には三六〇尺の

六倍十四五・六〇尺という地割の存在することが想定されるといわれ、また卅条四里を復原したとき、それ以北の条里とは南北において約三六〇尺のずれのあることが指摘されている。この問題はやはり川原寺周辺条里の施行期、大和における統一条里の実施と深くかわるのでないかと思う。またその際の考察で条里区画間の道路の存在が、西大寺京北班田図や額安寺班田図の様式を参考に問題とされているようであるが、これら班田図に関する限りその里の境界の空白部に実質的な意味をもたせて考える必要はなく、それはやはり班田図の様式から来たものとすべきではなからうか。(拙稿「班田図と条里制」(『魚澄先生古稀記念国史学論叢』)。また寺辺条里の施行期の問題は、川原寺伽藍中軸線が条里にのっていないらしいことから、一応それ以後と考えられるが、結局は北門および築地の創設時期と密接につながるのであろう。その点調査の結果が、当初の北門・築地について大体奈良時代に始まり平安末期まで存続したと考えられる程度で、創設期を確定する手がかりがなかつたとして残念である。なお従来漠然と飛鳥時代の石造品と考えられていた亀石や、また弥勒石についてもその意義が考えられ、当初の位置や性質は判らないが二次的には里の境域を示すため用いられたのではないかとされたのも興味深い。これらについては私は進んで額安寺班田図の三ヶ所ほどに記されている石柱と同様、むしろ寺域の標示として考えるべきではなからうかと考えている。

最後に遺物に関するもう一つの問題は、塔の創建時の心礎近くから銀銭一個が出土したことである。創建時心礎には舍利奉安の設備はなかつたらしいが、はじめその礎石を搬入するため掘った穴の上、

心礎と同一レベルで南約一尺の位置から、中央に小さな孔のある半円形の銀銭一枚が金銅円板二枚とともに発見された。その出土状態からそれは擦立柱に関連して行われた儀式に関するものであろうと推定されているが、それはかつて崇福寺心礎から舍利容器とともに出土した十二枚の銀銭とよく似たものである。創建時期をほぼ同じくする寺院の、しかも同様心礎から発見されたことは、この種の銀銭を考える上に重要な意味をもつであろう。ただ今回の場合は半円形にタガネで切断されたその半片であるところに何か問題がありそうであるが、銀銭については単なる宗教的儀式の問題を超えて、そのころの銀銭の果たした役割を改めて考える必要がある。

六

以上本書について全く私の観点から興味ある問題点を列記してみた。従つて他の多くの重要な成果について述べのこしている。また如上の記述についても、私の浅学から誤読誤解が含まれているかも知れない。そのためにも読者には直接本書に接せられることをお願いしたい。また、その際ぜひ川原寺に先行して行われた飛鳥寺の発掘調査報告書をも併読されることをお勧めしたい。なお最後に本書披見の間に心づいた二、三の点を記すことを許されたい。その一は本書には極めて鮮明有意義な図版写真が豊富に収載され、本文記述でもそれと対照できるような配慮されているが、せつかくの図版でもあるから、図版そのものについて、撮影地域とかその角度を图示するなど、総してもう少し詳しい説明が付けられているとより理解し易いのではないかと思う。また本文の記述も種々の制約があろうが、

貴重な発掘調査の成果を発掘にたずさわらなかつた人々や、後世に伝えるという意味で、できるだけ詳細とされる方が望ましいのでなかろうか。つぎに出土瓦についてはそのすべてを様式・時代に分類整理するという精密な調査法がとられ、各様式の総数と時代別百分率も算出されているが、各遺構別の状態もできれば知りたい。例えば軒平瓦・軒丸瓦などは時代ごと様式別の出土分布図でもあればと思うのは門外漢の慾目であろうか。もう一つ本文記述では尺とメートルが部分により混用されている。建築遺構などについては尺の

表示が意味をもつから、もちろんメートル法のみで統一はできないが、その間もう少し両者の用法に統一をはかることがこの種報告書一般についての課題でないかと考える。甕を得て蜀を望むの言となつたが、終りに川原寺に引きつづく平城宮址の発掘調査という多忙さのなかに、その成果を早くも公刊してわれわれの机上に贈られた関係者の方々の努力にもう一度敬意を表しておきたいと思う。

(A4判六二頁 図面一七 図版五八 挿図三三 奈良国立文化財研究所発行)